



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

王であるキリスト B年(2021年11月21日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ダニエル書 7章13—14節

第二朗読：ヨハネによる黙示録 1章5—8節

福音朗読：ヨハネによる福音書 18章33b—37節

## テーマ：待つ

### 三つの朗読から

第一朗読の「人の子」(13節)に注目してください。旧約聖書では「人の子」には三つの意味があります。一つは神さまとは違った存在としての人間を表します。「神は人でないから、偽ることはない。人の子でないから、悔いることはない」と聖書にあります。(民23章19節)。ですから、神さまは「人の子」を顧みられる方なのです(詩8編5節参照)。第二に預言者エゼキエルに対して神さまが呼びかけるときに「人の子」と呼びかけます(エゼ33章7節など参照)。第三に、今日の朗読箇所『ダニエル書』にあるように帝国の支配を終わらせるために神さまが送ってくださる者を「人の子のような者」と記しています(ダニ7章13節)。イエスさまもご自分のことを「人の子」と呼びますが、どの意味合いをこめて呼んでいたのでしょうか？

第二朗読の「雲」(7節)に目を注ぎましょう。聖書では雲に、いくつかの意味を与えています。第一に自然現象としての雲の意味です。第二に洗礼の前ぶれとしての雲です(1コリ10章1—4節参照)。第三に雲は神の顕れを示します。例えば、イエスさまの変容の場面で雲からの声が聞こえました。これは神さまの声です。また、イエスさまは雲に覆われて天に上げられました。またイエスさまは雲に乗って来られる方です。『マルコによる福音書』には次のように記されています。

60 そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」61 しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。62 イエスは言われた。「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」(14章60—62節)

今日の朗読箇所にある「雲に乗って」は直訳すると「雲と共に」となりますから、乗り物としての雲ではなく、神の現れのしるしとしての雲です。終わりの日にキリストは神さまと共に来られるのです。

福音朗読では朗読の本文ではなく、今日のミサでの「叙唱」に耳をすましてください。キリストを王としていただく国ではイエスさまの生きた姿が手本となります。「わたしがあなたがたを愛したように互いに愛し合いなさい」(ヨハ15章12,17節)と仰せになったイエスさまは、「わたしはあなたがたに手本を示しているのだ」(13章15節)ともおっしゃいます。イエスさま自身が、わたしたちが生きる生き方の模範となるのです。イエスさまは専制君主のように人々を支配するために来たのではありません。「仕えるために、また多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」(マコ10章45節)のです。そして、イエスさまはわたしたちが愛の戒めを守ることができるように聖霊を約束し、聖霊を与えてくださいます(ロマ5章5節、8章2-10節参照)。

このように、イエスさまは王として人々のところを支配します。そしてイエスさまに従って生きる「新しい人々」によって世界と社会が「真理と生命の国、聖性と恩恵の国、正義と愛と平和の国」(今日の叙唱より)へと変わるようにと、王であるイエスさまは今日も働き続けられるのです。

## 説教

「王であるキリストの祭日」は1925年に教皇ピオ11世によって制定されました。最初の公会議であるニケア公会議開催1600年を記念してのことです。当初は諸聖人の祭日の直前の日曜日、すなわち10月の最終日曜日に祝われていました。当時は第一次世界大戦後の混乱のなかで無神論や独裁体制が台頭していました。キリストこそが人類世界を治める最高の王であることが示されたのです。1969年の典礼暦の改革で年間の最終主日に祝われるようになりました。それは終末における完成とキリスト再臨への希望と待望とを関連づけてのことでした。

今週で2021年の典礼暦年も終わります。再び王として来られるイエスさまの再臨を待ち望みながら、あのベトレヘムで生まれた救い主の最初の来臨を記念する待降節が来週から始まります。「待ち望む」こと、これこそがキリスト教の霊性の中心点です。